

ながいたちゅうがた  
長板中型

埼玉県指定無形文化財

平成 16 年 3 月 23 日 初山 寛氏（大瀬）・大熊 敏男氏（古新田）

八潮市の代表的地場産業に染色業がある。

その染色技術のひとつ、長板中型（形）とは、長さ 6.5 メートル、幅 46 センチの長い板に生地を貼付けて、中くらいの大きさの紋様を型染めする技法で、生地を板に貼付けて糊置きをし、藍甕に浸して染色する。

長板の伝承技術の難しさは 1 反の晒布の両面に、寸分も違わず同じ形をつけることである。複雑な模様の場合は数枚の異なる型紙を用いる。長板中型の技法を一通り覚えるのに 5 年から 7 年ほどかかり、一人前になるには 10 年の歳月が必要だといわれている。

江戸時代の中頃、庶民に湯浴みの習慣が広まり、吸水性のよい木綿を素材とした湯上がり用の衣類

（浴衣）が着用されるにともない、長板中型が広まった。特に藍一色の両面柄の浴衣は、江戸っ子の中で「粋」なものとして愛用され、18 世紀後半頃からは、女性の間で柄物がもてはやされた。

八潮市域は、江戸に近く、生地の水洗いに必要な軟水が豊富なことから、農閑期の副業として形付けや藍染めが盛んに行われた。大正時代中頃から「注染」による浴衣染めが盛んになると、長板中型は衰退し、戦中戦後の物価統制によって木綿がその統制下に入ると壊滅的な打撃を受けた。

現在市内の長板中型形付けの伝承技術者として、初山寛氏、大熊敏男氏が埼玉県無形文化財に指定されている。



©公開の有無：非公開